

開明
小説

春雨文庫

二編

下



A416
C

春雨文庫第二輯卷之下

東京

松村春輔著述

大久保春驪校訂

第六回

再説力石吉三郎さきもちろしの女房つま増ましの夫むらとちろし力石りんとんが因循いんじゆんする
 小耐こなえかねて床とこ掛かるる刀やまを取とり佳弱りよわき小脇こわき抱かへ
 込こ襪まひきかかららげげ出いんとせせと引ひ止とられても断然つらたし止と
 ららず思おもひ切きらら有あ様さまの女おんな似にあ合あぬ奮ふん発はつふて丈ば丈ふ由ゆ

48-7522

や風聞かぜきこと聴きをきくなど腹はらの立つ島田佐兵衛しまださへゑや文吉ぶんきち
めの仕事しごとと判然はつぜんとらうとかくそ彼奴かやつららぐ素首すくびひ
き抜き棄すて且かつ那村岡なむらおかさ々の修羅しゆらの市安執いちやすしつと暗くらら
させとおもひ煩わづらふ折をりもよく備前びぜんの御家中ごうちゆうと言い
かけいよく耳みみふ口くちとよせと言いふ方かたが力ちからと添そへ
ぎふとのとも天あまの助けたすけと悦よろこびても文吉ぶんきちの高たかが
目明めあき一ひと首くび引き抜ぬけ安やすけととも島田佐兵衛しまださへゑの名なふ
一ひとあふ閑白かんぱくさ々の内うちあぐ並ならぶ者ものるき當時とうじの汰た

春雨三下二

利きき殊と小関東せうかんとうの光ひかりりぐあまを徒あづかふ奴やつらの多おほいの
とら彼やつも中なく油断あぶらだんとせず家いえも在ありても空蟬うつせみの
衣ぬぎ脱ぬけのかろふくして置あて居あ所ところと人ひとふ知しらせねせね計
策さくるく手てと下くだし遣やり損そとねとら一大事いちだいじと思おもひ案あん
トとるころより何様なんざうやら彼様かつらやら今日けふまま因循いんじゆん其
方かたも荒井あらいで文吉ぶんきちの話わたりとききて来きと日ひかろ村岡むらおかさ々の
の雛あひこを報あひ敵かたきが討うちたい一心いっしん既すふ今夜こんやもかろ有あり
さぬ其そのの志氣こころざしあぐさ倥倥さうさう一ひとツつの手段てだてがあると言いふ



普門二二三

外そとでももと三條木屋町さんじょうきやまちに居ゐる君香きんかうととら女にの元祇園もとぎげん
新地しんちの三軒屋さんげんやの舞子まいことと島田佐兵衛しまださへゑが請うけいど
一別妾ひとわかめとして置家おきうちを島田しまだの忍しのびて此こゝところへ
折々しりしり来るくるところと先頃りょうどやよりして夫それさ人も出で
這まる時ときと人ひと不し知らずさば君香きんかうの家うちへ来きると狙ねらひ
取とり押おへく討捕うちとらを袋ふくろの鼠ねずみひと一いけととも如何いかに
みせん便宜べんぎと知しる由よしとサ此こゝ処ところが工夫くふうどろと
お傍まが侍さむらいと求もとめ君香きんかうの家うちへ立た入いる赴向しゆかうが有ある

あつらひ今宵こんしやう一人ひとりひ文吉ぶんきちの家うちへ往むかひ勝かちつと働はたらき
君香きんかうと親おやしくまらうへ島田しまだの来きるとの直ただし知しる
る彼奴かやつめと首尾しゆびよく討うちと志し文吉ぶんきち如ごとき其日そのひの中うち
ふも踏殺ふみころせり今文吉いまぶんきちと討うちとて島田佐兵衛しまださへゑとその
終まあいて村岡むらおかさむの河灵がいのげん前まへへ立た込こみ敵たかと討うちま
とと報知ほうちまうす沢たくの性ちやうくめん物ものとお傍まが侍さむらい下くだも
會得あひとくが性ちやう為人ひとりト説諭とくごんさして今更いまさらふ刀やぐらと甚そこ処ところへ
並ならび人ひとも乳ちちの毒どくらうい身みありと信しんひ胸むねと撫なり下くだげ

吐息つき「左様」と関取の心よゝめ知れで女の智慧の浅
まらるる前後の監えなく且那さぬと関東へ下りたわ
文吉めの仕業と聞き故が討といひ一助うらふ前の事
と腰抜けるぞと言と死の人の耻うしのお肢も立
が堪忍して嘔つくり笑つくりしての舌でひげの升ヨ
宜う人アアまア魂魄が落ついと开いて伎前の河藩
とわへエ下々コレ声が高いハイと袖あぐ口と掩ふ折
も再びび時の撞ボオン月落四辺の森々たり

斯て後お坊の本名とかくいお聞とあらとめ手蔓と
君香の家お求む是の力石吉三郎が村岡老女お助
けらま角力おありーと言ふとと畧知る人の有
るゆゑあり然れむお坊が一念届き木屋町るる君
香の元めく下婢を尋るよーとゆき込る早速島
田の別荘の雇ひ人とあり諸事お心と配り居と
るふ今雷島田が忍びく来り泊んと為ると慥り
お見きりめ夫力石お内通し力石よりして慷慨の

浪士ふ知らせカ石と始め堵士と雖多く木屋町の
 君香が許へ引き入れ一の七月二十日の夜ふぞ有
 りける

然れバ君香と枕と並べ島田佐兵衛へ赤卧一たり
 一が人の窺ふ足音一て障子ふ移る武士の影坊
 主ふ驚き準備の一刀抜ききまぐる蚊帳と飛びいど
 身がまふ做すとり障子と外より蹴をまゝ一跳り入と
 二人の壮士夫とつるより声かけて一島田佐兵衛天

誅の又と清よと切りはくる島田を元来舌頭の剣ふ人
 の殺一ても武術ふ一猶疎けと一圃ひ挑むの勢ひまく
 彼方此方へ潜り逃げ二人の間とつと抜て持くら刀と投
 げ付けなぐる明き一雨戸と
 僥倖ふ庭へ
 ひろりと飛で
 下り切戸の
 口より逃げ



出いす前まへふ二王にわうの如ごとく突つ立たし一ひと待まち伏ぶせり一ひとる力ちから石いし
あいく「トツコい何なに処ところへ往ゆく積つりとト手てと差さし伸のしと衫えん
首くび押おで後のち方ほうへ引ひき戻もしとのまま宙ちゆうふ振ふら下さツ相あひ圖づ
の呼よ子ぶこと吹あ鳴きしと同どう志しとままとめ静しず々と高たか瀬せ川がわまで
退まきまりり

是これより力ちから石いしの慷きやう慨がいの諸しよ藩はん士しと共ともふ高たか瀬せ川がわの傍かたわらふ
て島しま田の佐さ兵べい衛ゑと討うちここし其その首くびと青あお竹たけの先さきふ
刺さし貫つぬき罪つみの次つぎ第だいと書かき記しし二十四にじゅう日にちの早はや

春雨二下七

天あまふ四よ條じょう河が原がらへ晒さらしたり又また目め明あしの文ぶん吉きちる此この
こととと岐まき大おほいふ恐おそれ早はやくも其その身みと隠かくしたれ
を皆みな時ときが程ほどの知しれざしが力ちから石いしの手てふ手てとさけ
終つひふ是これとも生な捕とら三さん條じょう河が原がらへ連つれ性せうき素すをぶらと
あいしと溢あり殺ころし罪つみとのべらる捨すれとて死し骸がいと其その処ところ
ふ晒さらせしの九こ月げつ朔しやく日にちの事ことふぞ有ありける総すべて是これら
の支し件けんの僕ぼくがりのせし復ふた古こ夢む物もの語ごての本ほんふ委ゑん
しく掲かげ載のせしとまま省ちよきと此こ處ところふの贅ぜいせぬ

あり元來此書ハ正史の裏とち女の事跡と記す
と以て主旨と做しつゝりのよりゆゑ力石の妻
阿増が貞と忠との真心ありて人不知
らさんと思ひくよりのすさそなり其後力石吉
三郎ハ藤村鐵石ら不與一 大和國五條不旗と揚
たしレグ十津川の役又戦死とてより一 増ハ夫
力石吉三郎及び老女村岡の爲メ法衣を着て天
窓を剃らぬと心ふ守る尼法師古郷備前又立

春雨二下八

かゝり行ひまゝく在り侍らるが其後の如何なる
いたるや音信と得て後ふ記さん

第七回

名ありあの花の都の麩屋街より中白山ふ人の知る
大和いさゝかに支那印度のぐら些ハ西洋の書籍も
鬻ぐ横田清兵衛の家名と俵屋と唱へ号と嫌々
舎と呼び文事と好む風雅を樂むのそあらず劍
術柔術の奥儀成さむ腕前もまこと抜群なり

が義ぎ不ふすそ利り後のち不ふ一一金きん銭せんとて媚こ戎げん献けんぶる商あき
人の類どひみあらず然されば亜あ米め利り加か合あ衆しゆ國こくの軍ぐん艦かん
浦うら賀が不ふ渡わた来きせしり幕まく府ふの官くわん吏り威い勢せいとらしむ
ひ政せい令れいやうやく度どと失うしへを勤きん王わう家けの處あや士しら外ぐわい異い
の為ため不ふ日に本ほんの聖せいせらまんと恐おそれおひく都みやこへ走をせ
集あつり攘じやう夷いの計けい議ぎ不ふ苦く辛しんの折せりかゝ横よこ田た清せい兵べい衛ゑ
勤きん王わう第だい一いつのりりのありたゞて其その黨とう不ふ加かさし殊と
ふ長ちやう州しゅう侯こうへへ年ねん来らい御ご用ようと達たつ一いつ同どう藩はん士し桂けい小せう五ご郎らう
城しやう

春雨二下九

入いり一いつ専せんら事ことと周しゆ旋せんありしり茲ここ不ふたいて洛らく中ちゆう
へ自おのら強きやう々と穂あひ々々ありぬ景あき勢せいゆる幕まく府ふ小せう護ご
衛ゑいの士しと格かくし勤きん王わうの黨とうと拂はらちんとすりと嚴げん
重ぢゆうあり然しかるふ此こ布ふどより横よこ田た清せい兵べい衛ゑいのふと祗ぎ
園えん町の藝げい子こ京きやう屋やの小せう常じやうとて今こと年ねん十じゆ九くふなる美べい
嬢ぢやうのりへ通つうひ始おとめし日ひ不ふ増まし其その中ちゆう深ふかく
り隠かくすと為なれど今ことへし浮うき名ならりまをあぞ成な

りみけり

○梓弓あざなちるどの言いへど風かぜさんと寒さむき糸いとます睦むす月つき
りたや中なかつの十日じゅうにちの末すえッうゝ人のひとのの落おちつゝ夜よ々降ふ
り出です六むッのの登のぼびらみ淡雪あはゆきのなありあが
ゆぬあやねのな名なとりりうも着きて寐ね一ひと蒲よもぎ素すのな白しろふ
て棉わたとありうゝ東あづま今いま朝あさの景けい一ひと言いぬとて十
五六ごろうより美み嬢ぢやうが二階にかいの障子しょうじと細目こまめよよつけ表おもてののか
と覗のぞいと見みるるぐうぐうコこノ一ひと寸すん常じやうおおさんさん来きるるはは洗せんよ積つみ

春雨二十

つことしトい言いれて同おな年としどろの乙女おとめも外そと面おもてと赤あかるるが
めめコこニに常じやうぼるるさんさんのやううる浮うれ座頭ざとうふも雪ゆきの降つつ
このこの白しろくく見みるるンんどどヨよモもシし小こ女めさんさん早はやくく来きて泳なああん
ああゆゆぬぬとと言いの景けい色しきをを一ひと覧らんるるささいいよよウう一ひと早はやくく
るるくくつつててもも逃にげげるる性せうくくものもの無なののどどううもも寛あつりりと
おお出でるるなないいヨよととてて景けい色しきをを一ひと覧らんどどとと廿ふた半はん可か通つう
ぢぢややアあるるいいクく一ひと丈ぢやうでもでも彼かの人ひとがが漢かん語ごととつつわわいいトと女め
房ぶどうあありりててままららああいいとと言いととりりののコこヘへンん漢かん語ごととりりのの



顔くわの赤あい髪いけの長ながい鉞あ刀ま豆まへ柄えとすげとあ柄える物ものと
 持もつ居おる人ひとどと思おもつ居おるくせふ常一ちや漢かん語ごと
 りみあのひと彼ひとの人ひとが流なが行りせまどめまのう子こへ一あ馬ま鹿かヲ
 お言いひる彼あヲやア枯こ蘇そ城じやう外がいの寒かん山ざん寺じとあ寺じ
 の和わ尚しやうさんざんが初はつめめのどア福ふく一ちやまア乳き樂らくるま夫それ
 と吾わ儂なんア漢かん語ごととあろつろとあ瘡あとのサ「漢かん語ごの議ぎ論ろん」
 でお銚ちやう子しと忘わすれとのうこネへと小こ常じやうふ言いれ二人ふにのし
 女めへ「ホほニ何なんのげんげん徳とくふもななくぬ言いさささひで。オお所しよ」

可^お笑^いやと狂^{くる}びなぐらう小^こ次^じの石^{いし}の階^{かゝ}子^こを下^{くだ}りく
往^{むか}きくうりく

常^{つね}はる常^{つね}あし言^いはる小^こ常^{つね}が相^あ手^ての舞^ま子^こみく
横^{よこ}田^た清^{せい}兵^{へい}衛^ゑを夕^{ゆふ}アより先^ま計^{けい}町^{まち}の藤^{ふじ}村^{むら}と呼^よぶ
家^いみ来^きり小^こ常^{つね}常^{つね}はる常^{つね}香^{かう}と呼^よび北^{きた}比^ひとら
が降^ふり積^つむ雪^{ゆき}の珍^{めづ}らしとく狂^{くる}がけありの小^こ
鍋^{なべ}どてホ一^{いつ}盃^{さかずき}始^{はじ}めうけとらるり藤^{ふじ}村^{むら}の清^{せい}兵^{へい}衛^ゑ
が妻^{さい}宅^{たく}が齊^{いっ}しく為^なし居^ゐるところと見^みとま

小^こ常^{つね}はる雪^{ゆき}と見^みる宜^{よろ}が明^あつをなして往^{むか}てサと立^た上^あ
り障^{しょう}子^このそむ人^{ひと}寄^よりて表^{おも}面^{めん}と見^みやり不^ふ寒^{さむ}いあんこ
大^{おほ}そ積^つつととピツちやりメつけ清^{せい}兵^{へい}衛^ゑの顔^{かほ}と
姪^{めい}さうみ見^み誥^ご荒^あ示^しとがら愛^{あい}敬^{けい}毛^げと指^{ゆび}め一^{いち}寸^{すん}
搔^か上^あげぬぐらア好^{こう}間^まさんが年^{とし}の性^{せい}をい付^つく
と都^{みやこ}々^々どと言^いはる君^{きみ}花^{はな}さんか得^え意^いで唄^{うた}ふ。花^{はな}ふ百^{ひゃく}
夜^よ来^きる客^{きやく}よりも雪^{ゆき}の一^{いつ}束^{たば}が頼^{たの}りいとん今^け日^{にち}の
吾^{われ}侘^わの心^{こころ}いさりと必^{かな}ひますんワと言^いひるぐら清^{せい}兵^{へい}工^{こう}

の傍へ居まが清き清水もまゝ小常の顔と見て莞尔
あるがごとく大きな雪の門ちがひ此頃ぢやア江戸く程
の宜のが来て仕こむので氣休めの等が大おん上つと
色観音さなうう教師と請待し手れんの試験と受す
あるるあ人「お前さんの検査より外ふ教師のるの
のどくろサ夫とお前さんい美しいのさんんると教師ふ
成り試験と考とどろくく氣が揉めておんき臭いで
ありまおア松「お前の振る水性生徒とりつと此方へ

氣が揉むのどア「オヤ何時こといが水性な悪さを
おまゝいさア水性の検査と受ませう「膝と摺
よせ押はける折く常哥と常はるが徳利と持て
バクと階子の段と上り来り「大さう遅いお炬が
ございまいとらうネ「今あの馬幸さんが雪どろけお
成て来て二人と捕へ悪戯とまらるので在すものなア
常おもん「冷たい手で人お抱つてさうゆくりてサ
「オヤ階子の音がまらうよ上つて来このぢやアあいつ上

つゝ来々々突飛してきうト言ふもあらず幫
閑の馬幸の階子を荒々しく踏まじり上り来り
「はは進くとと言ひるがう次の一トるへ蹲踞バ流石
舞子の常おハ夫と笑ひるがう身を進め可く
容子の何とく馬幸ハ真面目で老々ツちこむり「ハア
然れば候朋と心文久二年の春睦月の中の五日と
て江戸ふ在あハ大小名の規則の儀式ハ徒ひツ登
城ハ脈々ハ西丸下折々ハ赤出す櫓の太鼓鼓々ハ

らと音くと相番不閑老參政出門第一番ふ
久世侍従はいつ安藤侍従の先驅駕籠こき雨
衣ざん列と正して進ませり坂下門の君近まを往よ
とんえへる時ハ何とぞと赤出す銃一發安藤
疾るる輿側の衛士とはうぬく弾丸諸とも大刀頭
上み振りかざり踊り出さる六銘の浪士の中みハ先
登よ進々一人ハ大音あげ堀織部正の旧臣三嶋三
郎兵衛あらず對馬守殿ハ現參るさんと乗物目掛

飛とびかかるる是このこ推お参まりま興き側わのの衛ゑ士しもも一い同どう刀たとと拔ひ防ぼう禦ごの
接せ戦せんいとと烈れつととああめめ間まもも急いそぎぎ安あ藤ふじ侍ざい従じゆのの興きよりより出い
てて坂さか下したのの方かたへへ走はせせ往むかひひ後あと方かたううげげるるよりより三さん島しまのの無む
二ふた無む三さんのの護ご衛ゑのの従じゆ士しがが撃うちちとと来きるる太たい刀とうとと大だい喝かく
一いつ声せいとと打うきき拂はひひつつ衆しゆ敵てきのの又またのの下したととははつつとと抜ぬけ
汚よごしし返かへせせ故こ主しゆのの仇あだ安あ藤ふじ侍ざい従じゆ勝かち負まけししとと追おううけ
ささななもも切きりり付つけけぬぬがが肩かた先さきここづづらら不ふ断た割わりとと餘あまるる力ちから
刀やいばのの切き先さきとと石いしへへカかツつキきリり散ちるる火ひ花はな此こゝるるもも早はやくく對たい馬ば

守まもりりのの坂さか下した門かどへへ走はりり入いるる斯かくももああららんんとと安あ藤ふじ方かたもも不
意いふふ備そなへへるる忍しのびびのの従じゆ者しやとと遠とほままききあありりてて附つけけをを是
ららのの勇ゆう士し一いつ同どうふふすすのの事ことありりとと刀やいば抜ぬききつつてて六む人にんのの浪なみ
士しとと取とりりままいいてて右みぎやや左ひだりやや前まへららししるる上うへへ下したかからら切き
りりわわききままがが三さん島しまととななららぬぬ六む名なのの浪なみ士しもも今いまはは是これままででト
難たがいいてて切きりりとと雀さか舞ま城じやうありり湟わづらひのの水みづ際ぎはのの土つちととままじじの
ははるる是これ非ひもも無なきき世よのの今いま朝あさのの新あらた々た先さき物ものががささららはは是これ
ままぐぐててレレレレココテンテンののおお仕し舞まいいどどトト身み形かたちとと帯おびひひ盃さか盤ばんのの傍そば



へより「横田の且那の彼様」の話が大好どころで、
と直に紐つけて来やうとが、横田の裏と返して大騒動
併し掃部さぬの時分と遠つて、劍術はうい鎗の浪人
難刀揉術、謙ありいの巡礼古手かひ節季候はまじく
身と変させ忍びの供ふして、何るのどろろ水戸の浪人の
内田万之助といふのあんどの大造は強うこそうどが僕
の夜這ひと来く本望と遂ずは仕舞つてこの無残念で
ござんやうとらう是も元の起りの外必人ううどと言ふ話

所が浪士と安藤侯の衛士と一人で二役勤めて其骨折の
息はきふか安いは用どが常づるさん一才お酌をあんが上
奉るツ「餘り変つて新波なので耳へをうり身がをり馬幸
先生が此寒いふ大汗うての接戦と気が付あんどオオ常お
子大きいの人次でるうて呉んると言なぐら紙入と小常お出させ
二歩金と二三ツ紙お捨り小常お渡せば小常お馬が前よ金引お
者「是せんありやア大願成就身振声いろで懐中へ押入れ常づる
み次で貰つて茶碗の酒と一息ふらつと飲とやうと耳へ

是ちやアまう一ト合戦働うまらうがお礼うら先へ且那有がと
 う小常さん宜しくト拝とまら清を清ハ一人何やう點頭な
 がう「彼根よとの珍説が有うと夜が秩半でも宜知らせう
 長々持前が本屋と来て居るうう商賣用おまらうのと丹して
 手根を話すと虫が好と見え何様も人より早く咲きてへ一
 吾侑ア又芝居の方どかり此度の何の狂言と為ると言と残
 一刻も早く咲とら一吾侑もさうまの井「甘くひぬらす奴実
 ハ唐茄子の初ありと新薩平芋の如と走り話と咲とら
 馬
 馬
 馬

のごらう「馬幸子の常おと戦ふ気ととんえて頻りふ抵
 枕まらやつ「世の中ふ連れて魂魄へ刺ぐ人ちイッといわ荒
 く成て来まうとわう「吾侑の根な女子を捕へて魂魄へ
 刺ぐ生るもあいのんご「真正は移人悪らしい「口で鑄てんで
 譽て陰でのろけておぬ顔「馬幸さんすつかりと言人「呀と
 穿つと「自己ア「根とやうやア江戸の西丸下の話うら
 とて又安藤さうなといふ人の自分の權妻とら他の娘と
 うと異人の女房おまらうことの評判とら実録といふ思わと

後馬が「僕つひうが常つねおさんさんと口説くどきおどろたたのも他よそ目めろくろろとと空うつその
 板いたどぐ実録じつろくののどろろ安藤あんどう侯こうのの一件いっけんも大方おほうほう真正しんせいの
 話わいでせへやせう常つねおお何時いつののるまふやら擔端のきのの雪ゆきと
 掘ほんで来きて馬幸ばこうがの衫えりへの步あ込こば馬幸ばこうのの怖おそりの目めややたたまま打うち
 との身み怯ひるる仕し方かたと首くびと突つ出きだし振ふり向むくくとき常つねおお笑わらひ
 手てととささ階子かゝのの段だんままぐ逃にげ往ゆききろり

春雨文庫二編下之巻 終

関明
小説

春雨文庫

第四編より 近世の烈婦孝女乃傳説を
引續き出版 記しる面白き珍書あり

松村春輔編輯
復古夢物語

初編より
八編まで 出版

連ハ明治太平記の前篇より嘉永
六年亞米利加使節相舟浦賀へ来船
以來明治元年伏見戦争迄委し
き面白き書也

和田定節編輯
参考鹿兒島新誌

半紙本
初編より七篇
迄全部十五冊

此書西国征討の始末を詳細に
おもむき第一の実録あり

東京書肆

大島屋

武田傳右衛門

弥左工門町上三番地

010190509457

